

ずいそう

父のこと

谷口 雅



私の生まれ故郷は、伊豆大島です。

故郷は 遠きにありて 想うもの とか言いますが、四季折々に移ろいの美を見せてくれ、私にとっては、理想の故郷です。

古希も過ぎ、いよいよ人生の終焉が近づこうとしている今、時々帰郷するのが最大の楽しみになりました。

友人たちと一緒に酒を酌み交わし、昔話に花を咲かせるのも楽しいことなのですが、実はもっと楽しい事があるのです。

それは、父の残した日記を読むことなのです。

私の父は、大島で生まれ、大島以外での生活を知りません。もちろん、昔で言う尋常小学校しか出ておりません。

私の祖父の家には、当時度々、芸大の学生たちが、夏休みなどに長期間滞在し、風景画などを描いていたようです。

後に超有名になった画家も学生時代、泊まったとも聞いたことがあります。

その学生仲間の一人が、父が20歳になったときに日記をプレゼントしてくれたのです。

それ以降毎年そのプレゼントは続き、父もそれ以降77歳で他界するまで、一日の空白もなく、実に57冊の日記を残しています。

その日記を読むのが最大の楽しみになりました。

最初のころは、字も下手で、誤字脱字も多く、読みにくく判読し難い字もたくさんありましたが、最後の方になると、自己流の草書体文字になっておりました。

帰郷の折、曝書ついでに、何冊かの日記を読みました。

やはり印象に残っているのは、敗戦が濃厚な昭和20年2月4日。長兄が、太平洋戦争の激戦地ソロモン海戦で戦死したのですが、その知らせを受けた日の記述です。

曰く“お国のためとは言え、何故、覚（長男の名前）が、戦死しなければならないのか。遺骨が無いのだから、どこか南洋の無人島で生きているに違いない。戦死が誤報であって欲しい”

等々書かれていました。ページの片隅に、何かシミのようなものがありました。それが、私には、父の涙のように思えてならないのです。

そんな父に、中学生のころ“毎日日記を書いている、何か楽しいことがあるの？”と聞くと、父は“いつの

日か、この自分で書いた自分史をじっくり読むのだ”と楽しそうに答えていました。

その父が、じっくり自分史を読むことも無く30数年前に他界しました。

当日の日記は、入院先の病室で書いたのでしょう。わずか2行でした。

“今朝、雅（私）が“なます”を持ってきてくれた。久しぶりに、旨いものを食べた”

ほとんど毎日とっていいくらい、私は愚妻の作るおかずを病院に運ぶのですが、その大部分を母が食べていたようです。

料理ともいえぬ“なます”を、どんな高価な料理よりも、おいしいと言って全部平らげた、父の日記を、やる瀬無い思いで読みました。

父の亡くなった日は土曜日でした。

私は例に漏れず、麻雀をやっていました。

父の死亡時刻は17時38分でした。

その時刻前後、私は、同僚に国士無双の“北”を打ち込んだのです。

何かぞっとするものを感じました。

いつも、朝病院に寄ると、帰りは病院に寄らないことが多いのですが、虫の知らせというのでしょうか、夜の9時頃病院に行きました。

丁度、エレベーター前で着いたばかりの妻と子どもに会い、妻から父の死を知らされました。

7階で下りると、死と言うものが理解できない息子が、父の部屋に飛んで行き、“おじいちゃん、おじいちゃん”と叫びながらドアを開けたのですが、もう既に父はそこにはいませんでした。暗い地下の一室にいたのです。

ひとしきり、妻に、こんな大事なときに、居場所が分からないのは、どういうことか文句を言われたのは言うまでもありません。

私も父に倣って、日記をつけているのですが、私の日記には、来る日も、又来る日もほとんど毎日のように、酒と麻雀の文字が見えるのですが…

主のいない病室を、どんとたたいた息子も2人の父親。

感無量。